



平成24年10月15日

卓話 『指導者が領土を持ち出す時』
ジャーナリスト
小林 和男 様



皆さんこんにちは。領土というのは愛国心と非常に結びついています。今年の夏、韓国の大統領が竹島に上陸しました。これは古今東西、歴史の一つを問わず、共通する問題点を示しました。つまり指導者が領土を持ちだすときは必ず二つの要素を持っている。一つは国内に何か問題を抱えていること。もう一つはその本人自身に問題を抱えていることです。

私が東ヨーロッパ担当の特派員として取材して歩いたとき、ユーゴスラビアのチトー大統領が領土問題を国の操縦に使う名人だということを知りました。彼はカリスマ的な力で民族的にも経済的にも宗教的にもばらばらな地域を一つに纏めていたんですが、国内には経済をはじめ山ほど問題を抱えていた。彼はそれらの問題が表面化しそうになると必ず隣国に対して領土問題を持ち出して国民のナショナリズムを掻き立て、結果として国内の経済問題、宗教問題を忘れさせていました。

私は今回の韓国大統領の竹島上陸を見て、明確にチトーの小型版だと思いました。そのとき彼が期待したのは日本が大騒ぎしてくれることで、残念ながら日本の政治は彼の思惑に完全に乗ってしまった。どうすればいいかというと、野田総理大臣が最後に談話という形で理を分けて竹島は日本のだということを説明した、あれだけいいんです。政治家や外交官はメディアがどう騒ごうと、こういう方針で行くんだということでもやらないと相手の思う壺になってしまう。残念ながら日本は、李大統領が、支持率が10%台になってしまった状況の中で行ったことだというのをわ

きまえていなかった。

領土がナショナリズムを掻き立てるのはロシアも同じです。150年前、ロシアが領土拡張政策の中でトルコにちょっかいを出し、それに反発したイギリス、フランスと戦争になり、



ロシアが負けて終わります。その戦費の始末に困ったロシア、ロマノフ王朝は、アラスカを1平方km当たり5ドルという値段でアメリカに売ってしまいます。その後、アラスカでは金や石油や天然ガスが発見されました。ロシアではこの話が教科書に載っていて、皇帝のアレクサンダー2世が金貨数枚で領土を売ってしまったと表現されています。獲得した領土は絶対に手放してはならんということを子どものころから叩き込まれている。それがロシアのナショナリズムの根源です。

プーチンは、在任中に現在10位のロシアのGDPを5位にしたいと考えていますが、容易ではありません。石油、天然ガスを売るだけでは追いつかない。その時に何が必要かというと、信頼できる近代工業国のパートナーです。それにはやはり日本です。だからそのときに日本がきちんと対応すれば、私は北方4島にも影響してくると思います。

領土はナショナリズムの根源で、それを悪用する政治家はいっぱいいます。しかしそれを解決するときにはリーダーシップが必要です。どうか皆さん、日本に期待できる政治家を産んでください。

ありがとうございました。